

マグソクワガタ (甲虫目：クワガタムシ科) の道東からの新記録

荒谷 邦雄¹・土屋 慶丞²

マグソクワガタ (*Nicagus japonicus*) は体長7～9mm程度の小型種で、細長い楕円形の体形や、大あごが背面から見えないため、一見したところコガネムシのように見える特異なクワガタムシである。その特異な形態からコブスジコガネ科とされたり(野村, 1960; Kurosawa, 1976; Kikuta, 1986)、独立のマグソクワガタ科としてあつかわれたりされたこともあるが(石田・藤岡, 1988)、田花・奥田(1992)は、本種の幼虫の中・後脚に発音器がある点や成虫の触角片状節が密着しない点など、クワガタムシ科の特徴をそなえているとし、本科にふくめるべきとした。以降、本種はクワガタムシ科とするあつかいが定着し(Maes, 1992; 藤岡, 2001; 藤田, 2010)、ミトコンドリア16S rRNA遺伝子による系統解析でも、本属はクワガタムシ科であることが示され、マダラクワガタ属、ルリクワガタ属、ツヤハダクワガタ属とともに「祖先的系統群」にふくまれることが示された(細谷・荒谷, 2006)。

本種は生態も他のクワガタムシ類とは大きく異なり、成虫は昼行性で、5～6月に発生し、ブナ林など落葉広葉樹林が上流域に広がる河川の砂地の河川敷などで♂が飛翔を行い、地面上の♀と交尾する。幼虫は砂中に埋没した軟腐朽材や軟らかい白色腐朽材に穿孔する。

本種は北海道と本州(西端は兵庫県)に分布し、北海道ではタイプ産地である石狩地方の河口を始め、内陸の芦別市(荒木, 1987)など道南～道央で記録されている。筆者の一人荒谷は、本種を記録がないと思われる道東地域から採集したのでここに報告する。

マグソクワガタ♂1
(図1)

2022年6月5日 釧路市内の河口付近の河川敷(保全の観点から詳細な産地は公表しない)



図1 流木上に飛来した
マグソクワガタ雄成虫

本種が採集された日は快晴で、午後1時頃に飛来した。その後、1時間ほど調査を続けたが追加個体は得られなかった。採集された雄成虫は新鮮で、死体も発見されなかったことから、おそらく本格的な成虫の発生はもう少し後と推定された。

周辺は大小様々な多数の流木が見られたが(図2)、増水時には水没してしまうようで、実際に本種が採集された地点のすぐ横の流木の中からは溺死したと思われるアカアシクワガタの終齢幼虫や蛹室中の雌新成虫の死体が発見された(図3)。



図2 河川敷に集積した流木



図3 流木中から発見されたアカアシクワガタの溺死体(実線円内は黒く変色した終齢幼虫、点線円内は蛹室中の雌新成虫)

シクワガタの終齢幼虫や蛹室中の雌新成虫の死体が発見された(図3)。

本種は道東地域に広く分布している可能性が高く、各地での今後の調査が待たれる。

今回の調査は、文科省科研費学術変革領域(A)「流域圏生態系におけるヒトと自然の共生(No.21H05181)」の補助を受けて実施した。

引用文献

- 荒木哲(1987) マグソクワガタを芦別市で採集. *Jezoensis* 14: 96.
- 藤岡昌介.(2001) 日本産コガネムシ上科総目録. コガネムシ研究会. 293 pp.
- 藤田宏.(2010) 月刊むし・昆虫大図鑑シリーズ6, 世界のクワガタムシ大図鑑. むし社, 東京. 472pp., 248pls.
- 細谷忠嗣・荒谷邦雄.(2006) DNAから見た日本産クワガタムシ13属の系統関係～大あごに見られる性的二型進化のパターンを探る～. 月刊むし(426): 41-49.
- 石田正明・藤岡昌介.(1988) 日本産コガネムシ主科目録(第一版補訂版). *Lamellicornia, Tokyo Suppl.* (2): 1-62.
- Kikuta, T. (1986) On the higher taxa of the stag beetle family Lucanidae, Coleoptera. *Ann. ent. Soc. Am.* 90: 453-461.
- Kurosawa, Y. (1976) Family Lucanidae. Check-list of Coleoptera of Japan 1:1-9.
- Maes, J.-M. (1992) Lista de los Lucanidae (Coleoptera) del mundo. *Revista Nicaraguense de Entomologia*, (22)
- 田花雅一 奥田則夫(1992) マグソクワガタについて, 月刊むし(256): 3-10.

1 九州大学大学院比較社会文化研究院

2 釧路市立博物館